

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 12 日現在

機関番号：32511

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22500642

研究課題名（和文）地域コミュニティにおける犬の飼い主たちの社会関係

研究課題名（英文）Interaction created by dog-walking - Meaning for owners in an urban community -

研究代表者

菊池 和美（KIKUCHI KAZUMI）

帝京平成大学・健康メディカル学部・講師

研究者番号：00406703

研究成果の概要（和文）：

報告者は、参与観察調査および実証研究を通して、犬の飼い主らが自らの住む地域コミュニティで行っている「犬の散歩」が、飼い主にとっての、人々との地域交流関係の形成と維持の機会となること、また、その関係性の発展が地域コミュニティにおける潜在的な人的資源形成に繋がり、散歩を行う地域社会への愛着と関心「わが町意識」を高め、ソーシャル・キャピタル醸成のプラットフォームとなる可能性を有することを指摘した。

研究成果の概要（英文）：

We found that dog-walking has a variety of social networking points, and therefore has an important community impact. Dog walkers build networks without pressure, and can exchange information frankly and interact at their own pace. It includes people of various backgrounds, and takes a variety of relationship forms, which becomes useful for participants. Even though they don't know each other well, they share a rather high level of trust, due to few expectations. Through dog-walking, people build an attractive social network in the community. It is thought that dog-walking influences both continuance and development, which overall promotes the growth of "social capital".

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	2,100,000	630,000	2,730,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学、応用健康科学

キーワード：コミュニティ、社会関係、余暇活動、犬の散歩、ソーシャル・キャピタル

1. 研究開始当初の背景

（1）地域コミュニティにおける犬の飼育
わが国のペットとしての「犬」の飼育数は、12000万頭余りと、小中学生の総数を上回る。特に子育てを終え高齢期に差しかかる50歳以上の飼い主の増加傾向が指摘されている。ペットの世話は「ニューレジャー（新しい余

暇活動）」として社会・経済面からも注目されている。特に「犬の散歩」は実施頻度が高く、定期的な外出を伴うため、人々との間の相互行為が顕在化しやすい活動である。しかし一方で、飼育数の増加に伴う急激な生活圏への流入は、地域住民とのトラブルなど、地域社会に少なからぬ影響を及ぼしている。

(2) 高齢社会における社会交流

国民生活白書によれば、人々は有事の助け合いなど、コミュニティ機能に期待感をもち、自らもボランティアや社会貢献型の活動に興味をもっているにもかかわらず、実際に参加するには至らず、依然として近隣との交流関係には希薄さが指摘されている。

コミュニティ機能の再生を促す上では、地域に暮らす人々の交流関係（ネットワーク）の基に、地域への高い評価やお互いさまという意識、生活上の安心感などを高め、社会関係資源（ソーシャル・キャピタル）を醸成することが重要である。この交流関係の維持には、寿命、主観的健康感、生活満足度、精神的健康などとの関連が指摘される。特に高齢者では、余暇活動への参加が、その重要な役割を果たすとされ、介護予防や特定高齢者の支援にも、社会的貢献や世代間交流を促す新たな活動が提案されてきた。しかし、関係性の継続やその発展、また形成された関係性のコミュニティへの貢献の可能性などの検証は行われてこなかった。

2. 研究の目的

本論では、新しい余暇活動の一つ「犬の散歩」を楽しむ人々の相互行為を分析し、「犬の散歩」を通して地域コミュニティに形成される社会関係と、その発展形として行なわれているボランティア等の市民活動の経過から、地域のソーシャル・キャピタルの醸成にいかなる役割を担い得るのかを探索的に検討することとした。さらにこれらの研究で得られた知見をもとに全国調査を行い、他の地域における同様の知見を確認し、犬の飼い主たちの社会関係が、ソーシャル・キャピタル醸成にむけた人的資源として、どのように認識されているのかを明らかにすることとした。

3. 研究の方法

本論は、研究Ⅰ（質的研究）と研究Ⅱ（実証研究）を組み合わせ実施した（図1）。

研究Ⅰでは全体を二つに分け、参与観察による概念構成を試みた。研究①では、犬の散歩をしている飼い主たちが地域コミュニティ内においてどのように交流関係を形成しているのかを明らかにし、さらに研究Ⅰ②では、①で形成されたネットワークが、ボランティアや町内会など、さまざまな地域社会活動へと展開する過程と、その転換に関わるネットワーク特徴の抽出を試みた。

研究Ⅱでは、研究Ⅰにおいて得られた概念を基に調査票を使用し、「犬の散歩」および「その他」の地域コミュニティへの外出時の人的交流に対する態度と、その恩恵に対する

認識の比較から、犬の飼い主たちのネットワークが、地域コミュニティにおけるソーシャル・キャピタル醸成にどのような貢献を担い得るのかについて検討した。

以下にそれぞれの研究方法の詳細を記す。尚、本研究は2010年12月に帝京平成大学倫理委員会承認を得て実施した。

(1) 研究Ⅰ「フィールドワークによる概念構成①『犬の飼い主たちの交流』」

1) 場所

研究対象の「地域コミュニティ」は、都内A区南西部に位置するB地区（人口：30,851人、世帯数：14,195世帯、高齢化率：25.7%、面積：3.976km²、大都市郊外の戸建て住宅地で、地域内の飼育犬の保有率は10世帯に1世帯の割合と、他の都下郊外地域と同様比較的高い地域であった。観察地点は、このB地区内のC川沿い北よりにある緑道形式の公園の一角、D地点とした。

2) 対象者

対象者は、対象地域に在住し尚且つ観察地点で「犬の散歩」をしている人、およびこれらの人と何らかの会話をを行った人とし、調査主旨の説明と記録内容の提示を行い、研究協力の了承を得た人とした。

3) 時期

調査は、予備調査観察を経て、2008年7月から翌2009年6月に行った。全体を4期に分け1期につき2週間程度とし、荒天の日を除く、日没30分前の15分間に実施した。

4) 手続き

調査は、筆者自身も犬を連れて観察地点に滞留し実施した。観察内容は、対象者および対象者に話しかけた人との間の会話および、それに付随して生じた対象者の反応である。「話しかけた言葉」と、「話しかけられた言葉」（以下、「きっかけとなった言葉」と記す）、また、その際の対象者および対象者が話しかけた相手の反応、対象者に話しかけた人と対象者の反応について、観察終了直後に記録し、フィールドノート化した。

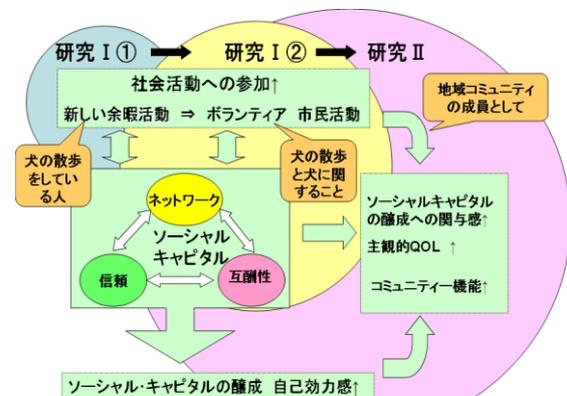


図1・研究ⅠおよびⅡの関係性、研究手順

5) 分析

分析には SPSS Text Analytics for Surveys Ver3.0 (IBM) を使用し、パソコン入力を経てデータ化した「きっかけとなった言葉」を、意味のある最小単位の言語レベルに分解し、その出現頻度を数量化した。出現頻度 30 回を一定の基準とした頻出語を抽出し、この頻出語を含む原文について、もとの会話の内容をくみ取ることができるよう考慮しながらコーディングと軸足コーディングを行った。

(2) 研究 I 「フィールドワークによる概念構成②『犬の飼い主たちの社会活動』」

1) 対象者

対象者は、研究 I ①と同じ都内 A 区、B 地域で組織されている「わんわんパトロール隊」の役員 7 名 (男性 3 名、女性 4 名、年齢 60~80 歳代) とした。同組織は、飼い主らが中心となって 6 年前に結成された地域貢献活動グループで、地元警察署や保健所、小学校等との連携を図り、地域の小学生の登下校の見守りや、地域の老人施設への訪問活動、地域清掃、区民祭り等のイベント参加など、多岐にわたる地域活動を行っていた。

2) 時期

調査は 2008 年 10 月から翌 1 月に行った。

3) 手順

まず対象者グループが参加しているイベント等へ筆者自身がボランティアとして参加しフィールドエントリーした。本研究の研究目的と調査方法への了解を得た上で、対象者間または他メンバーへの情報発信や連絡を目的とした電子メールの「やり取り (本文)」の内容分析を行った。具体的には、該当する全メール 386 通 (送信先数は 56 件) の同時添付を受け、パソコン上でフィールドノート化した。

4) 分析

データ解析には、SPSS Text Analytics for Surveys Ver3.0 (IBM) を用い、頻出語と、文章の意味別分類 (ネガティブなもの、ポジティブなもの、その他の 3 分類) の上位語 5 位までを占めた文章の原文をすべて選び出し、コーディング、軸足コーディングを経て、カテゴリーの抽出を行った。一連のコーディングの作業過程においては、習熟者の助言と、共同研究者ら複数名の協力を得た。

(3) 研究 II 「犬の飼い主たちの地域コミュニティにおける社会関係特徴」

1) 対象者

対象者は、20 歳以上の犬の飼い主で、調査協力に同意の上、全設問に回答した 2000 名 (沖縄を除く全国の男性 988 名、女性 1012 名、平均年齢 49.5 ± 21.34 歳) とした。

2) 時期

調査は 2012 年 3 月 6~12 日に実施した。

3) 手順

調査は、インターネット二段階調査方式で実施した。一次調査では、回答者本人が主に現在自宅で犬の世話をしているとした人を抽出した。その中から一家族につき一名を対象に、二次調査への協力を依頼し、当該期間中に指定の Web ページにアクセスし、調査協力への同意を得た上で回答を依頼した。

4) 調査項目

調査項目は、基本属性と主観的健康観、犬に関する情報のほか、「犬の散歩」および「犬の散歩以外の近所等への外出 (以下、その他)」の際、双方における人的交流状況と行動とした。具体的には、「見ず知らずの人」に「話しかけられると煩わしい」と思うか、「知っている人」に対して「会釈する」「挨拶する」「話しかける」等をそれぞれの程度行うか 5 段階で、また「どのようなお付き合いをするか (以下、交流内容)」、「何人と面識や交流があるか (交流量)」、「どのくらいの頻度か (交流頻度)」について尋ね、それぞれ選択肢による回答を得た。

5) 分析

調査項目ごとに「犬の散歩」と「その他」に分けてクロス集計化し、SPSS statistics for survey 17.0 (IBM) を使用し χ^2 検定を行った。

4. 研究成果

(1) 研究 I ①の成果

4 期合計で 45 回の観察が行われた。対象者は 57 名 (男性 30 名、女性 27 名) であった。このうち犬を連れていた人は 52 名 (男性 26 名、女性 26 名、延べ人数 337 名、このうち犬を連れていた人は 296 名) であった。対象者の年齢は、60 歳代が 36 名、70 歳代が 19 名、80 歳代が 2 名であった。記録された会話総数は 1,0869 個。このうち「きっかけとなった言葉」として分析対象とした言葉は、5498 語。これを単語レベルで分析した結果、30 回以上出現した頻出語は 22 語であった。

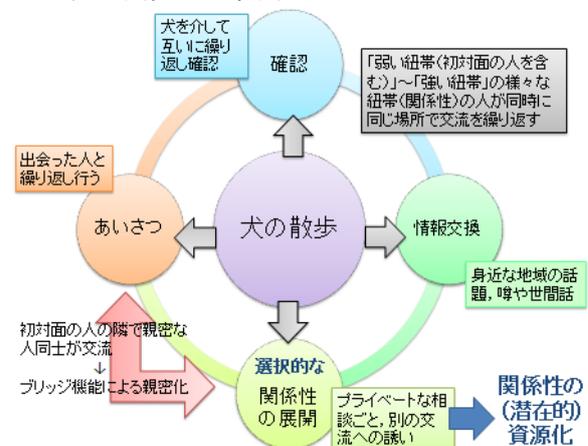


図2 研究 I ①結果 犬の飼い主のパーソナルネットワーク

これら 22 語を含む会話原文の意味解釈を行い、コーディング、軸足コーディングを行った結果、「あいさつ」、「確認」、「情報交換」、「関係性の展開」の4つのカテゴリーが抽出された(図2)。

観察地点において対象者らは、単に「犬の散歩」で出会った人に挨拶し、自然に声を掛けあっているのみならず、犬を介して互いを繰り返し「確認」し、また、身近な地域の話や噂話、世間話等を通して、互いの「情報交換」を行うなかで、選択的な「関係性の展開」の機会を得ていることが明らかとなった。また、これらの交流は段階的に生じるものではなく、観察地点の狭いエリアにおいて、同時並行的に複数の人々の間で生じていることが確認された。これは、コンボモデルの辺縁に位置する「(初対面の人を含む)弱い紐帯」から「強い紐帯」までの様々な紐帯(関係性)の人々が同時に同じ場所に会したことにより、交流のための「プラットフォーム」が形成され、継時的変化だけでは引き起こし得ない多くの人々の間に「関係性の展開」が生じることを可能としたものと考えられた。

(2) 研究 I ②の成果

同研究で分析対象となったすべての会話の数は 1,803 個、文章中に含まれた品詞別の語数は、種類別に、名詞が 1,557 語(メンバー名や地域の地名が 698 語)、動詞は 881 語となった。

言葉の揺らぎを調節し、全体を 4 群に分け、すべての群に共通して 30 回以上出現した頻出語 25 語と、文章の意味別分類において出現頻度の高い順に上位 5 位までの語彙を含む原文、合計 1,087 個の文章を対象として、コーディングを経てカテゴリーの抽出を行った結果、「わんわんパトロール」の中心メンバーとして活動運営に関わる人々の交流は、「人的社会的資源の再認」、「能動的な活動への関わり」、「協力の依頼と勧誘」、「次のイベントの計画」の4つのカテゴリーに分類された(図3)。

「わんわんパトロール隊」の中心メンバーは、常に人的社会的資源を最大限に活用すべく、地域の「人・物・出来事への関心」を払い、「強い紐帯(で結びついたメンバー)の能動的な活動」により、また一方で対象者らそれぞれの「犬の散歩」をきっかけとした「弱い紐帯の力」を活用し、幅広く多様な地域の人々や組織の協力を得ながら、地域のさまざまな人と組織に「協力の依頼と勧誘」の働きかけを行い、その恩恵を受け、感謝をしつつ、次々と先の計画を立てながら「活動を推進」していた。この活動を推進する過程で行った様々な交流は、対象者らのみならず、地域コミュニティの人々や組織との間に、「わが町意識(安心・安全・信頼感)」を高

めたものと考えられた。また、この活動を推進に協力し実際に社会貢献活動へと関わる中で、「地域コミュニティ」の多種多様な地域の人々の間に「お互いさまという意識(互酬性の規範)」が生じたものと考えられた。

「犬の散歩」をきっかけに「地域コミュニティ」で地域貢献活動を行う「わんわんパトロール隊」のこれらの活動を支える社会的ネットワークには、旧来型の強い絆を背景とした地縁ネットワークと、弱い紐帯のブリッジ機能を活用した関係縁ネットワークの両側面を持つことが明らかとなった。

(3) 研究 II の成果

有効回答者は 2000 名(沖縄を除く全国の男性 988 名、女性 1012 名、平均年齢 49.5 ± 21.34 歳)で、飼い主と犬双方の 8 割以上が「非常に」もしくは「まあ健康」とした。飼育している犬の大きさは超小犬から中型犬がほぼ同数で計 9 割を占めた。対象者らは、「ほぼ毎日」59.6%、「住宅地の通路や歩道(80.6%)」や「緑地帯や公園(34.6%)」で「犬の散歩」を行っていた。「犬の散歩」と「その他」の回答に有意な差が認められた項目は、「見ず知らずの人」に「話しかけられると煩わしい」、「目があったら挨拶をする」、「話しかける」および「知っている人でも素通りする」および「交流内容」「交流頻度」であった。すなわち図4に示すように、「犬の散歩」の方が「その他」の外出に比べて、見ず知らずの人でも「話かけられると煩わしい」と感じる人は少なく、「目があつた時には挨拶をする」し、「知り合いに会えば自ら話かける」、「知っている人に会ったとき素通りする」人が少なく、また「交流内容」では「日常的に立ち話をする」人が多く、「交流頻度」では「日常的に付き合いがある」とする人が多い傾向が示された。

犬の飼い主らは、同じコミュニティへの外

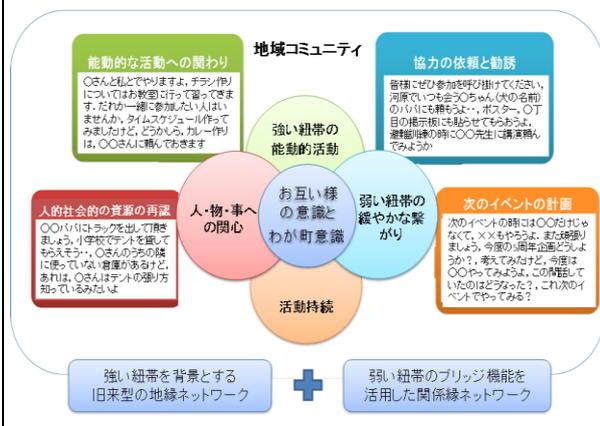


図3 研究 I ②結果 犬の飼い主らのソーシャルネットワーク

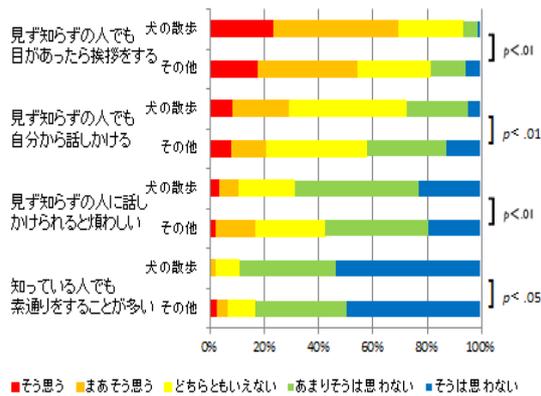


図4 研究Ⅱの結果 地域近隣で人に出会ったときの反応「犬の散歩」と「その他」の比較

出であっても「犬の散歩」の時のほうが「その他」の外出に比べて、見ず知らずの様々な人々との交流が新たに生じる可能性が高く、知り合いとの交流を継続する可能性が高く、またこれらの交流が日常的に身近な地域近隣で維持されていると認識していることが示唆された。

(4) 研究全体の成果より今後の展望

本研究では、地域コミュニティで行われている余暇活動の一つとして「犬の散歩」を取り上げた。そもそも余暇活動としての「犬の散歩」は、ペットとしての犬の世話という責任を伴う運動の機会であり、日常的に行われる活動である。飼い主にとっては家族の一員であるペットが喜ぶことから、活動継続への動機づけが高まり易い。

研究Ⅰ①では、この「犬の散歩」をきっかけに形成される社会的ネットワークが、弱い紐帯で結びつく緩やかな関係性を維持しつつ、ネットワーク成員間の選択的な「関係性の展開」を果たしていることが指摘された。研究Ⅰ②で研究対象とした「わんわんパトロール」では、この「関係性の展開」により地域コミュニティにおいてさらに広く緩やかに人々を巻き込みながら、活動を継続することで、住民一人一人に地域コミュニティの社会的ネットワークの成員としての自覚と、行動を促す（自ら地域貢献的活動へ関与する、もしくは恩恵を自覚し、「わが町意識」や「お互いさま」という意識が生まれる）ことが指摘された。さらに研究Ⅱにおいては、研究Ⅰで指摘された現象が調査対象となった地域コミュニティにおける特殊な事象に留まらず全国各地においても同様の減少が指摘されることが示された。すなわち犬の飼い主らは「犬の散歩」の際、日常の「その他」の外出の際よりも、より積極的な交流態度や関係性の維持につながる行動をとる傾向にあることを自ら認識し、これらの行動が自らの地域への関心とも結びついていることを自覚

していることが明らかとなった。

これらのことから図5に示すように、「犬の散歩」は地域社会において人々との間の情報交換を促し、交流関係の形成と維持に働き、地域社会を知る機会を与え、飼い主が地域に溶け込むことを後押しする。地域への満足感や地域の人々への信頼感を生み出す可能性が指摘される。さらにこれらの特徴が、活動に参加する人々の間に形成されたネットワークの「弱い紐帯の力」を発揮することに繋がり、結果として、地域コミュニティにおける人々の認知的ソーシャル・キャピタルの醸成に働いたものと考えられる。

わが国では、高齢社会の進行に伴い、身近な地域コミュニティレベルでの人的交流の重要性が増している。地域コミュニティに暮らす高齢者を含むすべての人々が互いに支え合う社会を構築していくためには、本論が取り上げた「犬の散歩」のように有機的つながりを自律的に生み出し、自ら関係財へと発展させることが可能な活動を上手く活用していくことが求められる。そのためにも、人々が自然発生的にすでに地域で行っているさまざまな活動を見出していかねば問われる。また、キーパーソン存在、環境条件、代替え手段やそのための選択肢の幅、旧来型の地域組織との融合、その他の地域貢献組織との有機的な連関の形成などが、ソーシャル・キャピタルを醸成する上での鍵となるものと考えられる。

近年我が国では高齢な飼い主の増加に伴い、飼育継続困難等の問題が深刻化している。本研究においても、ペット飼育に必要なとされる認知・身体機能の分析の必要性等の、新たな課題を指摘してきた。今後は「犬の散歩」を、習慣化された日常生活（関連）活動や外出行動などの「活動」としてとらえ、より詳細な分析を行う必要性が示唆される。報告者は既に、これら新たな課題に関する予備的研究にも一部着手している。今後、更に新たな課題にも対処すべく研究を継続する予定である。

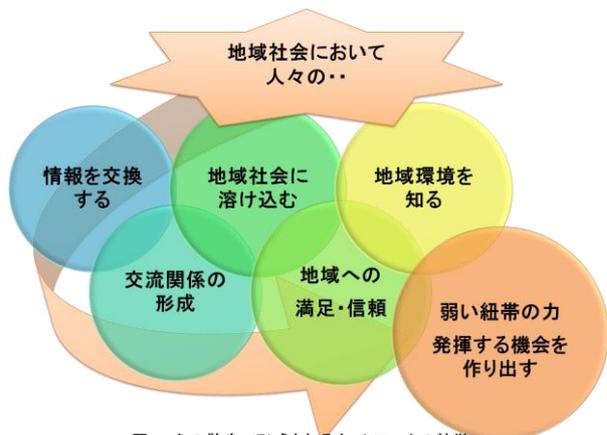


図5 犬の散歩で形成されるネットワークの特徴

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計7件)

- ①菊池和美, 長田久雄, 地域コミュニティにおける高齢者の「犬の散歩」をきっかけとした交流, 応用老年学会誌, 査読有 Vol.7-③, 2013 (掲載決定済)
- ②菊池和美・長田久雄・海老原絵理, 高齢者による高齢なペットの飼育で生じる困難, 老年社会科学, 34(2) 2012, 255
- ③菊池和美, 地域コミュニティにおける高齢者の余暇活動～社会関係の形成に関連する活動特徴の探索的調査～, 帝京平成大学紀要, 査読有, 23(1), 2012, 219-231
- ④菊池和美, 長田久雄, 「犬の散歩」のネットワーク:PDM(心理的距離地図)を用いた高齢男性4名の分析, 行動科学, 査読有, 48(2) 2010, 123-132
- ⑤菊池和美・長田久雄・上野佳代, 犬の飼い主を中心とした地域防犯活動(わんわんパトロール)に関する質的検討～ソーシャル・キャピタル醸成にかかわる高齢者の市民活動～, 老年社会科学, 査読有 32(2), 2010, 160
- ⑥日下倫子・菊池和美・長田久雄・上野佳代, 「犬の散歩」を通じた高齢者の地域における社会関係形成の意味～フィールドワーク手法を用いた質的検討～, 老年社会科学, 査読有 32(2), 2010, 159
- ⑦菊池和美, 地域コミュニティにおける余暇活動を通じた高齢者の社会関係の形成～ソーシャル・キャピタル醸成と関連する「犬の散歩」をきっかけとした社会的ネットワークの特徴, 桜美林大学大学院博士学位論文 査読有, 1-127, 2012

〔学会発表〕(計8件)

- ①菊池和美, 長田久雄, 高齢者の地域交流機会としての「犬の散歩」—インターネット全国調査結果をもとにして—, 応用老年学会, 2012年11月9日, 横浜国立大学(神奈川県)
- ②菊池和美, 長田久雄, 犬の飼い主らによる地域小規模ドッグランの取り組み, 利用者アンケートをもとに, 日本動物介在教育・教育学会, 2012年9月8日, 北里大学(青森県)
- ③菊池和美, 長田久雄, Community Activity Through Dog Ownership, Member's evaluation of their own activity, International congress of psychology(国際心理学会), 2012年7月23日, Cape Town International Convention Centre(南アフリカ)
- ④菊池和美, 高齢者が地域で「自由な時間の楽しみとして行っている」広義の余暇活動の探索的な調査分析, 日本作業療法学会, 2012年6月29日, シーガイアコンベンションセンター(宮崎県)
- ⑤菊池和美, 長田久雄, Leisure Activity of the Elderly in the Community, The Elements of the Activities which Build Social

Network, 2012年3月20日, 国際健康老年学会(World Congress on Healthy Aging), Kuala Lumpur Convention Center(マレーシア)

- ⑥菊池和美, 長田久雄, Dog ownership in Japan, Psychological and Social Challenges, International congress of Applied Psychology(国際応用心理学会), 2010年7月12日, Melbourne Convention & Exhibition Centre(豪州)
- ⑦菊池和美, 長田久雄, "Dog Walking" Networks Urban Community Network Creation and Environmental Characteristics: The Influences and Impact, International Congress of the World Federation of Occupational Therapists(国際作業療法学会), 2010年5月6日, Santiago Convention and Exhibition Center Chile(チリ)
- ⑧菊池和美, 長田久雄, Dog ownership in Japan, creation of social capital within the community, The International Conference of 4th Asian Congress of Health Psychology(国際健康心理学会), 2010年8月27日, Howard International House Taipei(台湾)

〔その他〕(計2件)

- ①菊池和美, 高齢な犬の飼い主たちの地域における活動とその影響, ジェロントロジカルカンファレンス シンポジウム発表, 2013年4月20日, 桜美林大学大学院
- ②菊池和美, ヒトがイヌとあるくということ, 高齢社会のコミュニティにおける犬の散歩ドッグウォーキング協会主催, 基調講演, 招待有, 2012年11月4日, ヤマザキ学園大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

菊池 和美 (KIKUCHI KAZUMI)
帝京平成大学・健康メディカル学部・准教授
研究者番号: 00406703

(2) 連携研究者

長田 久雄 (OSADA HISAO)
桜美林大学・大学院・老年学研究科・教授
研究者番号: 60150877